あなたに愛や恋は求めません5

ろうそくが終わりを告げる音がしてすっと目が覚めた。室内は暗さを増し、燭台にあるろうそくも辛うじて一本灯るのみ。真っ暗になれば火を付けに行くのが面倒だから今のうちにとは思うが、腕の中に囲った温もりも手放し難い。規則正しい寝息と鼓動が肌越しに伝わってくる。首の下に回してある腕を外しても瞼は少しも動かなかった。かなり深く眠っているらしい。

身を起こして燭台のもとに向かう。既に燃え尽きたろうそくを外して新しいろうそくに火を灯せば室内の明るさが増した。身じろぎする気配を感じベッドに戻り掛布の中に潜り込めば、柔い身体が身を擦り寄せてきた。眠りながら煽ってくるとは困った奴だ。手を伸ばそうとして、ティオの顔が浮かんだ。無理をかけた。まだ寝かせておかないと。

さっきよりも明るくなった室内。揺らめく火が濃い影を落とす。光が強ければ影の濃さも増す。イルーゼと俺のようだ。イルーゼは清濁併せ呑むことも出来るが本質的には清だ。実家で蔑ろにされても、婚約者に裏切られても腐らなかった。優遇されていた兄や姉の方が腐っていたのだから資質の問題だろう。これはゾルガーに嫁いでも変わらなかった。贅沢も思いのままなのに生活は慎ましく、使用人に当たることもしない。

一方の俺は濁が勝る。というか濁しかない。生まれた時から何も持たなかった俺の最も古い記憶は寂れた孤児院での生活だ。育ててくれた院長たちは善良で俺たちを等しく扱ってくれたが、所詮は捨てられた子どもたちの集まり。体の大きい年長者が年少者を搾取するのが常だった。体格がよかった俺はまだましだったが、それでもいい思い出など殆どなかった。

そんな中で騎士見習いや影へと誘われた時は有頂天になったように思う。その時の感情は覚えていないが。孤児院出身の子どもの将来など惨めなものだ。どんなに努力をしても孤児院出というだけで真っ当な仕事は得られないし、十五を過ぎれば自力で生きていかなければならない。平民、それも底辺に生まれた者が生きるのは簡単なことではない。

これは決して世に知られてはならないことだが、影だった時は何度も暗殺を命じられた。もう何人殺したかなど覚えてもいない。身体が大きい方だったとはいえ子どもだ、大人に比べれば小さく軽かった。躊躇がなかったと言えば嘘になるが、あの頃は選ばれた安堵が勝った。俺が初めて得た特別な役目、優秀な者だけが選ばれるのだと、国を支えるために必要だと言われた俺は疑いもせず居場所が出来たと喜んだ。

もっともそれで罪悪感を持つことはなかった。生きるためにはそうするしかなかったし、何もしなければ今頃死んでいた。影は暗示をかけられる。俺も例外ではなかった。心を守るために、機密を守るために、裏切らせないために。ゾルガーは猜疑心が強く秘密主義だ。元々傭兵だった頃の気質と筆頭侯爵という立場がそうさせた。生き残るためなのだから仕方がない。そうでなければとっくに消えていただろう。

俺が今までにしてきたことを知ったら、お前はどう思うだろうか。俺を厭うか。それとも……お前は行動が予測出来ないから確証が持てない。案外返り血に染まった俺を見ても平気そうな気もする。いや、さすがにそれはないか……

「……ヴォ……さ……」

夢を見ているのか。何か言ってはいるが意味のわかるものではなかった。緩んだ顔をしているから悪夢ではないのだろう。だったらいい。寝ているのに変わっていく表情を見つめる。

アーレントの娘が起こした今回の騒動。俺の妻にしろと、これに離縁しろと迫ってきた時には頭が沸いているのかと思った。世の中には話が通じない輩が一定数いることは承知しているし、そのような奴らとは永遠にわかり合えないことも理解している。だからあの騒動自体は大したものではなかった。

だが、これの行動力は俺の想定を超えていた。あの娘の戯言に動揺することはないと思っていたが、王太子が唆したとはいえ自ら俺を助けにくるとは。この柔い身体のどこにそんな力があるのか。もう少し武芸の才があったら影にも……

いや、無理だな。体力は鍛えれば得られるが、武器の扱いはどんなに鍛錬を積んでも無理なものは無理だ。これの才が俺の子に伝わらないことを願う。

コツン、と居間に続く扉が鳴った。扉の叩き方は各々違う。イルーゼを掛布で覆って身体を起こし、暗器を確かめてから入れと命じる。静かに扉が開いて人影が滑るように近付いてきた。

「おいおい、独占欲丸出しだな」

「なんの用だ」
揶揄いを流して用件を聞く。こいつがこの状況でここに来るのなら、それなりのことがあったのだろう。
「ザイデルが夜逃げするぞ」
「いつだ？」
「明日にでも。領地に向かう際に使う宿を予約している。だが……」
「向かう先は別か」
ろうそくの灯りの届かないところで頷くのが見えた。領地に戻るふりをして他国に逃げるか。この国にいても破滅するだけだから当然だが。ノイラートは俺に逆らえないし、イルクナーも娘を見限った。元々あの女はゲオルグの出奔の原因を作った件で勘当されたも同然だった。
「捕まえておけばいいか？」
「そうだな。そのまま王家に渡してやれ。叩けば色々出てくるだろう」
義弟の子を俺の子だと偽って押し付けようとしたザイデル伯爵夫妻。あんな稚拙なやり方でゾルガーを騙せると思っていたとは片腹痛い。イルクナーの息子が実子だと認めた以上、奴らに生き延びる道はない。貴族家のお家乗っ取りは一族郎党処刑に相当する重罪、ノイラートも俺に弱みを握られたから頼ることなど出来ん。となれば国外に逃げるしかないだろうが。
「わかったよ。それとお前の暗示はこのまま続けるぞ。止めるのは男児が生まれた後だ」
そうなるだろうな。その重要性は理解している。

「わかった」
「いいのか？」
「それが最善なのだろう？」
こいつの目的は承知している。危ういと思うのならやればいい。だからといってあれを手放す気はないが。
「まぁな。お前が愛を囁けば嫁は喜ぶだろうが、後継が先だ」
こいつがそう言うのなら仕方がない。ティオからもそう言われたのだろう。今は誰であろうと愛していると告げられないように暗示がかかっているらしい。自覚も確証もないがイルーゼの言葉に応えられなかったのもそのためだろう。その代わりに態度で示した。それで伝わらないのなら仕方がない。
「……本当に、その娘を傍に置くのか？」
暫くの沈黙の後、窺うようにそう尋ねられた。
「そうだと言っただろう」
そう言ったのをもう忘れたか？
「……そうか」
返ってきた言葉はそれだけだったが、込められている意図ははっきりしない。
「なんだ？」
「お前の本心を聞いておきたかっただけだ。お前が本気でそう願うのならこっちもそれに合わせな

きゃならんからな。ゾルガーはまだお前を失えない。その娘はお前の急所だ。困ったことに跳ねっ返りな上に自覚もない。守る側にとっちゃ厄介な相手だ」

「そこまで無謀ではないだろう」

これなりに考えて動いている。報告は怠らないし気になることはすぐに聞いてくる。勝手に飛び出していったりはしない。そうさせないように周りも固めてはいるが。

「ま、自重している方だとは思うけど……」

なんだ？　何が言いたい？

「懸念があるなら言え」

「懸念ってほどじゃねぇよ。ただ、お前が……」

「俺が、なんだ？」

こいつがこんな風に言い淀むなんて珍しい。そんなに面倒なことがあるのか？　見落としがあったか？

「俺もお前も、同じ人種だ」

「だろうな」

「だから綺麗なもんに憧れる。見た目じゃなく本質的な意味でだ。あの娘は性格がいいわけじゃないが、夜よりも陽の下が似合う。そういう奴と一緒にいると……いずれ辛くなるぞ」

珍しく真面目で真っ当なことを言い出した。そうだろうな、人は自分にないものに憧れるという。あれは陽の下が似合う。イルーゼに限らない、ブレンもアベルもティオも、向こう側の人間だ。あいつらの傍は居心地がいいが決して越えられない壁を感じる。その差を感じれば感じるほど辛くなるのかもしれない。そうなったら……耐え難くなったら、俺は……イルーゼを殺すか……

「そのための暗示だろう」

「まぁ、そうなんだけど……」

「だったら、そうならないようなものをかけておけ」

どんな暗示があるかは知らないが、ならば俺を狂わせるな。それがお前の役目だろう。影は心の内に化け物を飼うようになると言ったのは師だったか。師はそんな風には見えなかった。いつも穏やかで愛情深く、最期は俺を庇って死んだ。

「親父の言葉、忘れていないだろうな？」

「ああ」

守る者のために死ぬなと、生きろと、繰り返しそう言っていた。

「あれは親父の信条だった。自分にそう暗示をかけていた。ま、最期はお前を庇って死んだけどな」

「そうか」

暗示の件は知らなかった。俺を導いてくれた師。師がいなかったら影になってもすぐに死んでいただろう。師から与えられた教えは、知識は、今も俺を守っている。あれがいる限り死ねんな。フレディは弱すぎるし王は当てにならん。アベルやブレンでは力がない。任せられるのは一人いるが、引き受けないだろう。任せたくもないが。

「簡単には死ねんな」

あれのためなら、誰になんと言われようと生きるしかない。
「そうしてくれ。嫁を殺したお前は正気を失うか、その状況を作り出した相手に復讐する。そうなったら誰もお前を止められねぇからな」
「お前がいるだろう」
暗示もかけられるんだ、どうにでもなるだろうに。
「勘弁してくれ。絶対に勝てるならこんな話はしねぇよ」
「……善処する」
「はぁ、厄介な女に入れ込みやがって……」
頭を掻きながら大袈裟にため息をついて部屋を出ていった。ザイデルよりもあれが本題だったか。そこまで気に病むことか。奴が消えた扉を見ていたら、あれが身じろぎした。起こさぬよう掛布に潜り込むと寝たまま身を寄せてきた。細い首が目に入って、手を当ててみた。このまま力を籠めたらお前は死ぬだろう。何人も殺してきたんだ、容易いことだ。こんな男の前でよく安心しきって眠れるな。
「……曾孫か……遠すぎるぞ」
眠る耳元に囁いても返事はなかった。それまで正気でいられるだろうか。お前に近付けば近付くほど心が騒めく。その理由がなんなのかがわからないが、死に繋がるものでないことを願いながら目を閉じた。

◆◆◆

熱が下がってから半月後、風の冷たさが一層厳しくなった中、ヴォルフ様と共に王宮を訪れた。あれから王太子殿下の指示で関係者への取り調べが行われていた。フリーデル公爵一家はもちろんのこと、あの場にいたギュンター様やハリマン様、ニッセル子爵邸にいた使用人たちも含まれた。フリーデル公爵とクラリッサ様はまだ大人しかったけれど、ゲオルグ様は悪態をついて最後まで反抗的だったという。あんな人に執着されていたのかと思うとぞっとするわ。
取り調べの後は、陛下や王太子殿下、ヴォルフ様を始めとした五侯爵家の当主を交え、今後の対応を話し合われてきた。今回は王太子殿下も巻き込まれただけにアーレントには分の悪い話になった。だけど……殿下は自ら首を突っ込んでいったから半分言いがかりのようなものよね。アーレントにはお気の毒様としか言いようがないけれど、それも彼らが招いたことだから自業自得だわ。
その後案内されたのは王宮の中でも王族が住まう奥宮の談話室だった。王太子妃殿下や王子様方、また話し合いの後、離宮に戻られた国王陛下ご夫妻もまだお戻りではなかった。殿下は後処理のために王宮に残っていらっしゃったけれど、時々我が家にお忍びでやってきたりして羽を伸ばしているのは明らかだった。
「ああ、義姉上。もう大丈夫そうだね。元気になってよかった」
「その節はわざわざお見舞いをいただきまして、ありがとうございました」

「そんな他人行儀な……ほら、私たちは義理とはいえ姉弟なんだから。もう少し気楽に接してくれていいんだよ」

にこにことご機嫌な殿下だけど、さすがにその言葉を真に受ける気にはなれないわ。どれだけ血筋と年が離れていると……寝込んだ私が心配だと言ってお見舞いにまでいらっしゃった時には驚きと恥ずかしさのせいで、また熱が上がりそうになったわ。あれは私を口実にヴォルフ様に会いに来たのでしょうね。

「さっさと用件を話せ」

困惑する私を助けるかのようにヴォルフ様が陛下を急かされた。久しぶりの正装姿が凛々しくて顔が緩んでしまう。こんな時は隣ではなく向かい側に座りたいわね。

「もう、兄上はせっかちなんだから……」

「俺は忙しい。報告だけなら書面で済む」

「わかったよ、もう」

兄上冷たいと呟きながらも、殿下は傍にいた侍従を振り返った。侍従の手にあるトレイの上の紙の束を取ると、テーブルに置く。

「今回の報告はそこにまとめてあるから、詳しいことは後で読んでおいて」

そう言って殿下がこの件に関する処分を説明してくれた。まずアーレント国には関税を我が国の希望の率にすることと今回の件に対する賠償金の支払い、更には公爵家への罰を求めた。公爵が特使としてこの国を訪れていたから国にも責任の一端があると押し通されたらしい。公爵家への罰を

我が国が決めずアーレント国王に押し付けたのは、アーレント国内の反発を避けるためだとか。あんな人たちだけど、あの美貌もあって国内では人気があるそうだ。

フリーデル公爵とゲオルグ様には個別に迷惑料という名の賠償金の支払いと、我が国への終身の入国禁止が課せられた。王妃様もこの案には大層乗り気だったとか。クラリッサ様には我が国が望む相手との婚姻を、更には私やヴォルフ様への接触の禁止を命じた。

「ま、関税だけでもこっちとしては御の字だよ。ついでに人質も手に入れたし」

「人質、ですか？」

随分と物騒なことを口にされたわね。人質って、まさか……

「クラリッサ嬢だよ」

「どうされるのですか？　もしかして、グレシウスに？」

我が国から嫁がせるおつもり？　いえ、さすがにそれは難しいわよね……

「彼女はハリマンに嫁がせる」

「ハリマン様、ですか？」

思いもしない名が挙がったわね、それは想定していなかった。あのハリマン様に……

「グレシウスにと思っていたんだけど、あんな甘ったれではさすがに無理だろう？　嫁がせてもかえって禍根を残しそうだし。本人も嫌だ、それくらいなら死んだ方がましだって泣くしね。それでハリマンはどうだって尋ねたら二つ返事で了承したよ」

確かにクラリッサ様が単身グレシウスでやっていけるとは思えないわ。ちやほやされて育ったよ

うだから冷遇への耐性もなさそうだし。
「それに公爵の妻の父親はアーレント国の宰相でね。孫の彼女を溺愛しているんだって。彼女がこっちにいれば手を出しにくいでしょ？　まぁ、表向きは両国の関係強化のため、それにアーレントの王族が我が国に嫁げばグレシウスへの牽制にもなるしね」
　ヴォルフ様に視線を向けると頷かれたから、ご存じだったのね。それなら反対する理由はないわ。クラリッサ様がシリングス公爵やハリマン様に何を囁いても、弱みを握られていて事なかれ主義のハリマン様がヴォルフ様に逆らうなんて出来ないもの。嫁いだ後で彼女がヴォルフ様に突撃してこないかが心配だけど。
「あ、兄上や義姉上には近付かせないから心配しないで」
「ですが……」
　安心なんか出来ないわ。あんなにもヴォルフ様に執着していたのだから。
「うん。でもまぁ、彼女も目が覚めたというか、今は兄上を怖がっているから」
「え？　怖がって？」
「うん、騎士たちを戦闘不能にしちゃっただろう？　あれを見て怯えちゃったみたいでね」
「そうなのですか？　とっても素敵でしたのに」
　あんなにかっこいいお姿、滅多に見られないのにもったいないことを仰るのね。何度思い出しても惚れ惚れするほど凛々しかったのに。あの時のお姿を絵に残したかったわ。何かしら、殿下がなんとも言えない笑みを浮かべているけれど……何か変なことを言ったかしら？

「さすが義姉上。兄上、とっても素敵だったそうですよ」
　殿下がニヤニヤしながらヴォルフ様に話しかけたけれど、ヴォルフ様は話を続けろと言って取り合わなかった。
「はいはい。あ、クラリッサ嬢はこのまま我が国に滞在してもらうよ」
「このまま？　帰国されないのですか？」
「うん、人質だからね。母上預かりにして公爵夫人としての教育を受けてもらう。アーレントと我が国では公爵家の在り方が全然違うからね」
「左様ですか」
　まぁ、そうなるわね。我が国では公爵家が増えすぎるのを防ぐため、また王位簒奪を防ぐため、公爵位は一代限りで臣籍降下する際の下賜金や領地もささやかなもの。これは過去に王位継承争いで国が乱れた経験からで、同じ公爵家でも彼の国とでは権力や財力の在り方はまったく異なる。
「ギュンターは兄上が駒にするって言うから暫く様子を見ることにしたよ。ま、変な動きをしたらそこで終わりだけど」
　ギュンター様が……弱みを握っているし、あの方も頭はいいから余計なことはしないと思いたいわね。ヴォルフ様は影を送るなりして監視するのでしょうけれど、家族のためにも大人しくしていてほしいわ。
「シリングス公爵夫妻にはクラリッサ嬢の監視を命じたよ。こっちからも人を送る予定だけど、夫人はしっかりした方だから大丈夫だろう。アーレントの侍女は付けないと認めさせたしね」

それなら大丈夫かしら？　多分ヴォルフ様も人を送るわよね。いえ、もう入り込んでいるかもしれないけれど。

「あと、ザイデル夫妻はお家乗っ取りを企てたとして爵位はく奪の上で処刑、これは免れない。伯爵と前妻の間に生まれた子たちは前妻の実家が助命を願ったから、息子は前妻の一門の男爵家へ婿入り、娘も同様に男爵家への嫁入りで手を打った」

そこは妥当かしら。子どもたちはまだ成人していないから処刑は免れたのね。何かあれば前妻の実家が責任を取ると言っているのなら任せるしかない。ザイデル伯爵夫妻の処刑は貴族には牽制になるわね。

「最後にエクトルだけど、彼は処刑、幽閉中の家族も後を追うことになる」

「そう、ですか……」

では、アルビーナ様も……考えないようにしていたけれど今の法律ではそうなってしまう。本来ならミュンター前当主のアウグスト翁が処刑された時、一族もその後を追うはずだった。それを温情で幽閉に留めたのに今回の事件。アルビーナ様たちがエクトル様の企てを知っていなかろうと、こうなっては処刑するしかない。

「家族は毒杯にと父上にお願いはしたよ。彼らは何も知らなかったことが証明されたからね」

「そうですか……ご厚情ありがとうございます」

同じ時間を過ごした級友の死。彼女とは色々あったけれど、実家での境遇が似ていたのもあって親近感を持っていたわ。なんとも重い気分になる。それでも毒杯なら苦しまずに済む、それだけがせめてもの救い。だからと言って割り切れるものではないけれど。

それにアルビーナ様には申し訳ないことをしてしまったわ。私が願わなければ彼女は再びハリマン様の婚約者にならなかった。彼女はハリマン様を慕っていたから余計な期待を持たせてしまったわね。彼女が領地にいたら、もしかしたらエクトル様を止めてくれたかもしれなかった。あの時は良かれと思ったけれど、こんな結果になるなんて……

「ごめんね、こんなことになって。でも義姉上のせいじゃないから。気に病まないで」

「いえ。お気遣いありがとうございます」

それを言うなら殿下のせいでもないのに。厳しい決断をしなければならないそのお立場に胸が痛んだ。ゾルガーの当主に代々暗示をかけているのもこんな気持ちに押し潰されないためなのでしょうね。確かにこんなことが日常茶飯事になったら心が負けてしまうもの。ヴォルフ様の暗示が解ければ私への愛の言葉を囁いてくれるかもしれないなんて思っていたけれど、とてもじゃないけどそれを望む気にはなれなかった。

それから数日後、フリーデル公爵一家は騎士に厳重に囲まれてアーレントへと向かった。その一行の中にクラリッサ様の姿はなく、彼女は王妃様と共に彼らを見送ったという。もう二度と母国に帰ることは出来ず、また父と兄は我が国への入国禁止を言い渡されているから、これが今生の別れになる。後で聞いた話だけど、彼女は帰国前から泣き続け、その後しばらくも泣き暮らしていたという。なんとも後味の悪い結果になったけれど、これも彼らが分を弁えてつまらぬ野心を持たなけ

れば起きなかったことだからどうしようもないわ。

それから更に半月ほど過ぎた頃、私は王都のカフェで今流行りのお茶とお菓子を堪能していた。明るい色合いの内装と品のある調度で揃えられた店舗は、社交シーズンが終わって多くの貴族が王都を去った今も多くの客で賑わっていたわ。席は他の客の様子がわからないように仕切られ、ゆったりとした空間で座り心地のいい長椅子に座って庭を眺めることが出来る。そこでヴォルフ様と二人きりで過ごす時間が、ヴォルフ様からの婚姻一年を記念する贈り物だった。

ここのところずっと慌ただしくてすっかり忘れていたけれど、婚姻式から一年が経っていた。婚姻式では荷馬車が屋敷に突入したり、初夜に暗殺者に侵入されたりと最初から波乱含みの婚姻生活は、今も落ち着いたとは言い難いわ。先日もヴォルフ様との婚姻を望んだクラリッサ様の一件で大騒ぎだったもの。

思えば婚約してからずっと、休みなく走り続けているような感じがするわ。ヴォルフ様との信頼関係は築けているはずだし、気持ちだって通じていると思うものの、愛の言葉はまだいただけない。寂しさは心の底で燻り続けているけれど、それでも私たちの間の距離は確実に縮まっているはず。そう思いたいわ。

今日は朝から今一番人気の歌劇を鑑賞し、その後貴族向けの店で昼食、午後からは宝飾店を見て回って、最後に訪れたのがこの店だった。観劇の席は王太子殿下からの贈り物で、それ以外はティオたちの意見を聞いてヴォルフ様が手配してくださったものだとか。お忙しいヴォルフ様が私のために……それを思うだけで胸が熱くなる。

普段は動きやすさを重視した騎士服ばかりのヴォルフ様も、今は黒に近い濃緑の貴族服をまとい、髪を撫でつけたお姿は文句なく凛々しかった。ずっと見つめていたいくらい素敵だわ。そんなヴォルフ様のエスコートで王立劇場に足を踏み込んだ時、否応なく注目を集めてしまったのは仕方がないと思う。仕事人間で趣味などないと、仕事が趣味なのだろうと言われているヴォルフ様は、ほとんど劇場に足を運んだことがなかったから。だけど、その事実が私の優越感を満たしてくれる。

観劇の後は王都で話題のお店で昼食をいただき、その後の宝飾店ではお揃いの指輪を購入したわ。銀の土台とデザインは同じだけど、ヴォルフ様には淡い水色の、私には鮮やかな緑の宝石で彩ったもので、お互いの瞳の色を取り入れた。普段使いになるお揃いのものが欲しかったから嬉しい。そしてこのカフェは今王都でもっとも話題に上っている店。こんな風に愛する人と訪ねる日が来るなんて、思いもしなかったわ。

「楽しめたか？」

「はい、もちろんです。素敵な一日をありがとうございます」

お茶の香りを楽しんでいるとヴォルフ様にそう尋ねられた。会話は少ないけれどこうして気にかけてくださるたびに、くすぐったい気持ちになる。

「他にも望みがあれば遠慮なく言え。前にも言ったが俺は察しがいい方ではないし、この手のことには疎い。言ってくれた方が助かる」

「そう言っていただけるだけで十分嬉しいです」

あのヴォルフ様なのよ。そりゃあ、根がお優しい方だとわかっているけれど、陛下にだって気を遣わない方が私には……そう思うと胸の奥が熱くなる。

「そんな気遣いはするな」

「そんなことを仰ったら、我儘になってしまいますわ」

今だって十分すぎるほどによくしていただいているのよ。実家のことだってそうだし、それ以外でも私の意を汲んでくださる。すでに十分すぎるのに、これ以上だなんてダメな人間になってしまいそうだわ。

「お前の我儘は我儘に入らない。他にないか？」

そんな風に言われては勘違いしてしまいそう。でも、それだけ信頼して気を許してくださっているのよね。心の中に優しい花が咲いたような満たされた気分が広がる。

「では……領地に行ってみたいです」

「領地に？」

難しいとわかってはいるけれど、以前からずっと思っていた願いを口にしてみた。いずれは連れて行ってくださると思うけれど、望んでいることだけでも知っていてほしい。

「はい。ゾルガーの領都は我が国でも五本の指に入る大都市だと伺っています。それに王都よりも南でこれからの季節は過ごしやすいとか」

「そうだな」

「今すぐは難しいと思いますけれど、機会があればぜひ」

ヴォルフ様の忙しさは十分に理解しているわ。だから無理にとは言わないけれど、領主は定期的に視察に回ると聞く。その時にでもご一緒させてほしい。

「わかった。今すぐは無理だが、機会を設けよう」

「ありがとうございます」

楽しみだわ。今までも何度かガウス領に行ったことはあるけれど、ガウス領は王都の北の山地で、ワイン作りには適していたものの辺鄙な場所だった。そんなところも物珍しくて興味は尽きなかったけれど、残念なことに楽しい思い出がないのよね。あの両親と兄姉と一緒だったのが一番の理由なのだけど。

「ゾルガー領の屋敷はどんなところですの？」

「そうだな。領都の端の小高い丘の上にある。眺めがいいな。夜は星がよく見える」

「星が？」

「ああ。月のない夜は見事だ」

意外だわ、ヴォルフ様が星を愛でる方だったなんて。風流なことは無駄だと気にも留めないかと思っていたから。

「影をしていた時は星で時間を見ていたからな」

「そ、そうですか」

実務的な理由だったわ。でも、そんなところもヴォルフ様らしいし、いろんな面を知ることが出来るのは嬉しい。それに、一緒に星空が見られたら、きっと素敵でしょうね。ガウス領でも星は綺

麗だった。ただガウスの領邸は山の中腹にあって木々が多かったからあまり星は見えなかった。丘の上なら期待出来るかしら。

「そう、だな。少し足を延ばせばお前が好みそうな景色のいい湖もあるし、上には大きな滝もある。馬なら野営なしで行けるだろう」

「湖に、滝ですか？」

「ああ。今は寒いだろうが夏は涼しくて気持ちがいい」

夏ならまだ先になるわね。早くても半年後かしら？　その時期に行く機会が来るといいのだけど。

「機会はいくらでもある。いつかは行けるだろう」

「ヴォルフ様？」

「曾孫が生まれるまで何十年もある。そうだろう？」

「え、ええ」

いつかはと、遠い先のように言われて残念だと気持ちが沈んだのに、一気に浮上した。曾孫までとの、私のあの言葉を覚えてくださっていたなんて。温かい何かが身体の奥から溢れ出てくる。そうね、私たちはこれから何十年も一緒なのだもの。全ての楽しみをさっさと終わらせてしまってはもったいないわ。

「それなら、海にも行けますか？」

「海か。少し遠いがいずれ行くだろう。あの街は王都や領都ともまた違う。活気があって異国人も多いし珍しいものに溢れているな」

噂には聞いていたけれど、本当なのね。どんな感じなのかしら？　想像もつかないわ。

「珍しいものが……そのお話だけでも聞かせてください」

「ああ、わかった」

淡々と無表情に返されるけれど、ちゃんと返事をしてくださるし、望めばお話もしてくださる。両親も兄も姉もこんな風に私の話を聞いてくれたことはなかったから、真っ直ぐに向き合ってくださることが嬉しくて泣きたくなる。愛の言葉はまだいただけないし笑顔を向けてくださることもないけれど、ちゃんと行動で示してくださっている。婚姻した時には、こんな未来が来るなんて思いもしなかった。

カフェを出ると日が西の空に向かってゆっくりと落ちている最中だった。まだ天は青いけれど、西の端は薄っすらと赤みを帯びて落日の訪れを告げていた。

「日が落ちるのが早くなったな」

「そうですね」

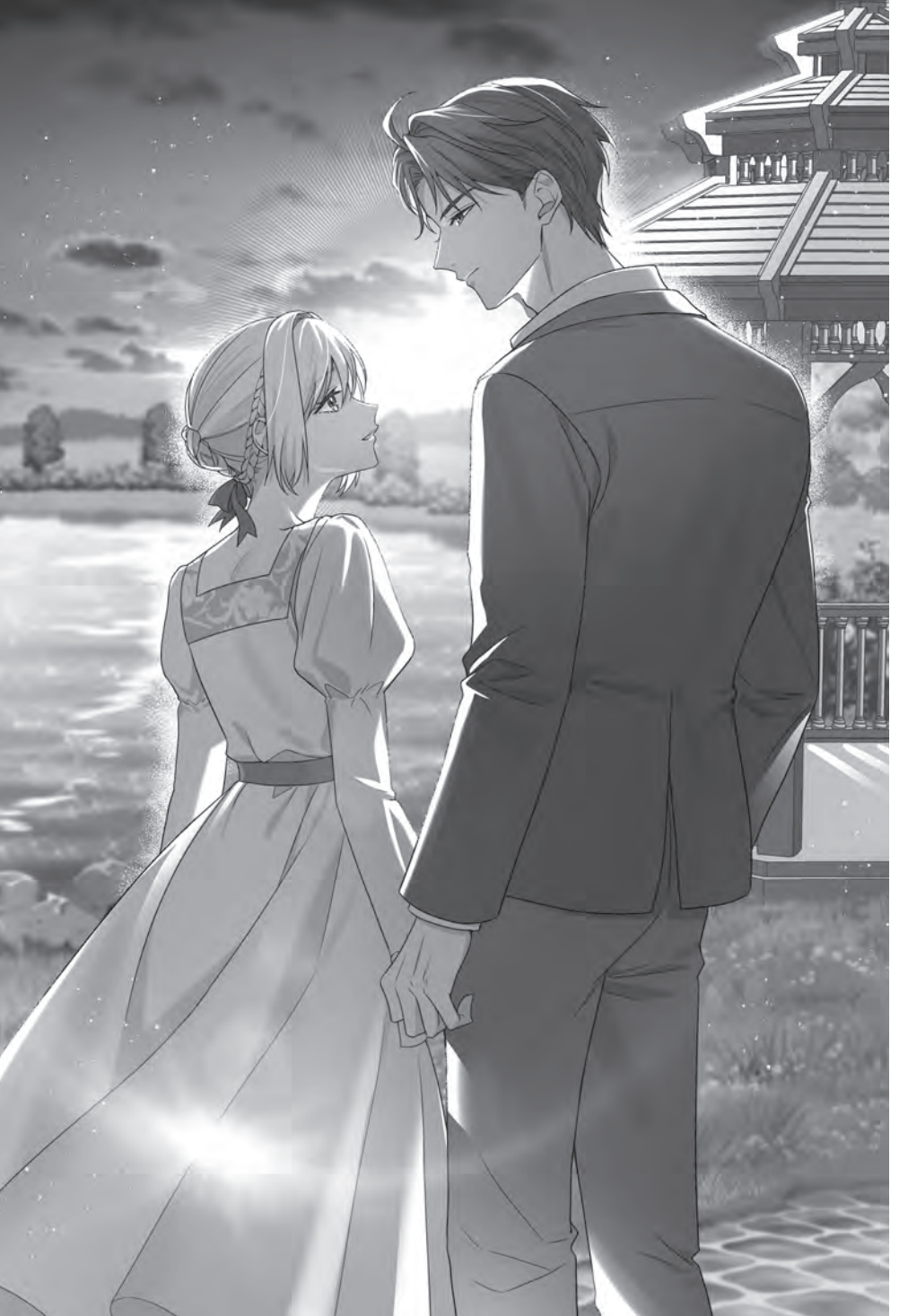
夏ならまだまだ日は高く、空は青一色だったでしょうね。頬を撫でる風も僅かに冷気を帯びていた。

「少し、遠回りする」

「え？　どちらへ？」

「行けばわかる」

尋ねてもそう繰り返されるだけで絶対に教えてはくださらなかった。どこに行くおつもりなの？



気になるけれど、危険があるなら真っ先に教えてくださるし、今日のような日にそんな無粋なことはなさらないはず。多分……

馬車が向かったのは王都の一角にある庭園だった。王家が所有する離宮があるけれど、古くて使い勝手が悪いからと、今は王族が滞在することはない。でもここの庭園はとても見事で時々開放されているのよね。何度かエルマ様たちと来たことがあるけれど、ヴォルフ様とは初めてだわ。

「こっちだ」

案内されたのは大きな池のある区画だった。夏になると舟遊びが出来るから人気の場所だけど、今はそんな時期も終わってひっそりとしていた。私も子どもの頃に来た記憶があるだけだわ。歩いている間に日は一層沈み、今は空の半分が赤みを帯びていた。

「そろそろだな」

ヴォルフ様が立ち止まって日に向かって立った。間には池があって……えっと、ここで、何が？ヴォルフ様を見上げると視線が前方に向いていた。促されるようにそちらに視線を向けて待ったところ……

「す、ごい……」

ゆるゆると日の角度が変わり、現れたのは光を受けて金色に染まる池だった。ろうそくの火を伸ばしたような光の帯が池に射し、風に吹かれる水面はろうそくのように光の帯を揺らす。遠くの山の端には同じように黄金色に輝く日が空と山を染めて見事な調和を生み出していた。この池にこんな表情があったなんて……知らなかったわ。

「凄いです。とても、綺麗ですね……」
「ああ。この時期だけだから知る者は少ないがな。領邸の近くにある湖は青と緑の中間の色だ。だが夕暮れには真っ赤に染まる」
「今から、楽しみです」
この景色もため息が出るほど美しくてずっと眺めていたいくらいだけど、領邸はまた違った景色があるのね。青緑の湖なら小さいけれどガウス領にもあったわ。でも、あの湖は山の中にあったから夕日に染まることはなかったわね。どんな風に色が移り変わっていくのかしら？　想像も出来ないけれど、きっと想像以上に素敵なのでしょうね……
「素敵な景色を、ありがとうございました」
「大したことではない。他にもお前が気に入りそうな景色はある」
「だったら……また見せてください」
「ああ」
そのまま並んで日が沈んでいくごとに変わる景色を無言で見つめていた。そっと手に触れる。拒絶されるかと思ったのに、察してくれたのか手を繋いでくださった。それだけで胸がいっぱいになって破裂してしまいそう……会話はなかったけれど心の繋がりを、私はこの時確かに感じていた。
季節は少しずつ移ろい、冷たい風にも春の気配を感じるようになった。日差しが暖まって風のない日は陽だまりが心地よく感じるようになった。早春の花が咲きそうだというのでロッテとザーラと共に護衛を伴って庭に出てみた。
「まぁ、もう枝先に蕾が膨らんでいるのね」
木の枝先には早くも花芽が膨らんでいてもう少しで咲きそうね。この木は真っ先に花を咲かせてくれて、更に暖かくなると黄色みがかかった白い花が枝一杯に咲くからなかなかに見応えがある。咲いたらヴォルフ様と一緒に眺めたいわ。先日の観劇の幸せな記憶が蘇って自ずと笑みが浮かぶ。幸せだわ、こんな幸せがずっと続いてほしい。
「あら、お飾りの奥様じゃありませんか」
幸せな気分に満たされていたのに刺々しい声が水を差した。その場にいた者の目が一斉に声の主に向けられる。
「リット嬢、奥様に対して無礼ですよ」
すかさずザーラが前に出て厳しい口調で窘めた。距離を取って後ろを付いてきた護衛は様子を見守っている。
リット子爵家令嬢ヘルガ嬢。筆頭分家の当主カール殿の唯一の娘であり末っ子の彼女は私の一つ下で、学園を卒業後はこの王都の屋敷で侍女として仕えている。来客向けの南棟で侍女として仕えているのだけど、最近こうして東棟にやってきて嫌味を言っていくのよね。
「あら、私はゾルガー侯爵家の筆頭分家であるリット家の娘なのよ。使用人風情に口出しされる謂れはないわ」
「仮にそうだとしても、あなたも今は侍女として仕える身。侯爵夫人でいらっしゃる奥様にそのよ

うな物言いをしていい立場ではありません」
　ザーラも引かないわね、真面目で礼儀作法に厳しいから。彼女が私の侍女に選ばれたのも、そんなところをヴォルフ様に評価されていたからだけど。正論で返されてヘルガ嬢が忌々しげに睨みつけた。そんな顔をして大丈夫なのかしら？　私には常に影が付いているから、今の言動はすべてヴォルフ様に伝わってしまうのに。
「ふん、子どもも産めない妻などなんの価値もないわ」
「そうですわ。旦那様のお子を産むのはこのヘルガ様ですわ」
　同意したのは同じ南棟の侍女でヘルガ嬢といつも一緒にいる令嬢。確か同じ年で、彼女もゾルガー家の分家の出だったわね。護衛が止めないのはそれも関係している。ゾルガー家門の中ではリット家の発言力は大きく、当主でもその意向を無下には出来ない。もっともヴォルフ様は気にされていないように見えるけれど。
「さっさと出ていきなさいよね。ああ、でも落ちぶれた伯爵家に戻っても先がないわねぇ。だったら仕方がないわ、この屋敷に置いてあげる。ふふ、私が産んだ子がゾルガー家を継ぐのよ。指をくわえて見ているがいいわ」
「な……！　言っていいことと悪いことがありますわ」
「いいのよ、ザーラ」
　一歩を踏み出したザーラの腕を取って止めた。
「イルーゼ様？」

「いいの。子が出来ないのは本当のことだし」
「ですが……」
　まだ何か言いたげにしているザーラに首を振る。気持ちは嬉しいけれど相手は分家筆頭のリット家の令嬢、万が一にも私に子が出来なかった場合、彼女が第二夫人になる可能性は否めない。将来的にザーラの立場が悪くなるのは避けたいわ。
「ふん、わかっているじゃない。子が産めない正夫人なんてなんの意味もないのよ」
　それだけを言うとヘルガ嬢は背を向けて行ってしまった。ロッテはよく耐えてくれたわ。もっとも、言い返さないように何度もお願いしたのだけど。いくらゾルガーは強さを優先するとはいえ、定期的にリット家から妻を迎えて血を残している。ヴォルフ様か、そのお子になるかはわからないけれど、いつかはリット家との間に子を設ける必要があるから。
「イルーゼ様……」
「大丈夫よ、ロッテ。ヴォルフ様は私を尊重しない人を第二夫人に迎えないと仰っていたわ。分家の令嬢を迎えるにしても、それは彼女じゃないわ」
　そう言いながらも心許なかった。今血が近い分家にはヴォルフ様と年の合う令嬢が少ないから。ヴォルフ様が拒んでもフレディ様が当主の座を辞退している今、拒み切れるかはわからないわ。
「イルーゼ様、気にしないでいいですよ。一年というけれど、その半分は旦那様に避妊に効くお茶を飲まされていたのですから」
　ロッテはそう励ましてくれるけれど、だからこそ不安もある。あのお茶のせいで妊娠しにくくなっ

ている可能性もあるのよね。あのお茶にはそんな効果はないとマルガは言っていたけれど、絶対とは言い難いもの。

それにヘルガ嬢が私に突っかかってくるのも理由がある。ヴォルフ様の前の婚約者は、陛下の第一王女でありヴォルフ様の実妹のアンジェリカ様と、陛下の異母弟のグレンゲル公爵の間に生まれたロジーナ様。彼女が不義の子であるだけでなく、叔父姪の間に生まれた禁忌の子であるため、相手が誰であろうと子を産むことは許されていなかった。

そんな事情もあってヘルガ嬢はヴォルフ様のお子を産むのは私だと、いずれ第二夫人になるのは自分だと思っていたらしい。多分そこにはリット家の意向もあったのでしょうね。ロジーナ様はまだ十四歳だから早くても五年は先になるのだけど、彼女はそれまで待つつもりだったとか。

だけど、そこに私が現れて状況は一転した。翌年に卒業を控えていた彼女は目の前でその計画を断たれてしまったから私をよく思っていないのよね。絶対に子を生せないロジーナ様と違って子を望める私が妻に収まったことで彼女の野望は潰えたように見えた。だけど、婚姻から一年経っても子が出来ないため、再びその野心に火が灯ってしまったらしい。

「イルーゼ様、この件はティオさんに報告いたします」

「ありがとう」

申し訳ないわ、ティオにも余計な手間をかけてしまうわね。言い返してもいいのだけど、同じ土俵に乗りたくはないと思ってしまうのは弱気になっているせい？　早くお子が来てくれたらこんな悩みはなくなるのに……

それから暫くして月のものがきたわ。またダメだったのね。授かりものだとわかっているけれど落ち込むのを止めることは出来なかった。悲しくて空しくて不甲斐なくて、唇を噛んで溢れそうになる感情を必死に押し留めた。泣いてもどうにもならないわ。それに、皆に心配をかけてしまう……お腹の痛みを抱えながら鬱々とした日を送った。

「痛むのか？」

自分の部屋で休んでいるとヴォルフ様が来てくださった。それを嬉しくも思うけれど、申し訳なさが増してくる。今は優しくされたくないのに……

「大丈夫です。でも……申し訳ありません」

「お前が謝ることはない」

「ですが……」

「子が出来ないのは俺のせいかもしれん。謝るなら俺の方だ」

それはあのお茶のことを仰っているのかしら。だけど、あれから随分日が経ったからその影響はもうないと思うわ。閨は十分やっていると思うし、月のものだって毎月ちゃんと来ている。母方の家系は多産系なので問題ないと思いたい。

「ゆっくり休め。お前がよければ俺の寝室を使えばいい」

「……よろしいのですか？」

「構わん」

本当にいいの？　ヴォルフ様は影をしていた頃もあった影響で血の匂いに敏感だと聞いていたから、避けていたけれど。

「ティオに言っておく」

そう言うとヴォルフ様は部屋を出ていかれたけれど……嬉しい。本当はお傍にいたかったし、ヘルガ嬢がヴォルフ様に迫るんじゃないかと不安だったから。それにヴォルフ様の寝室に慣れてしまったせいで自分の部屋が落ち着かないのよ。

それからはヴォルフ様の部屋で過ごした。不意に意味もなく泣きたくなったこともあるけれど、そんな時はヴォルフ様の枕を抱きしめてやり過ごしたわ。お腹が痛くて散歩を控えたのもあってヘルガ嬢と顔を合わせることもなかった。三日も過ぎると痛みは治まったものの、なんとなく気が滅入って外に出るのも億劫になっていた。

そうしている間に外は春めいた風に誘われて木の芽が更に膨らみ、早咲きの花々が少しずつ庭を彩るようになった。社交シーズンが近付き、王都内も屋敷も活気を取り戻しつつあった。

「奥様、新年の舞踏会の衣装が届いておりますよ」

月のものが終わって数日後、ティオがアードラー夫人の来訪を告げた。

「まぁ、早かったわね。ふふ、アードラー夫人の最高傑作にお目にかかれるかしら？」

我が家が援助している彼女の店は、今や王都でも一、二を争う人気の店になっていた。私がヴォルフ様と婚約するまではあまりぱっとしなかったのだけど、それもドレスを作る機会がなかったから。私が婚約者になるまでは女主人不在のゾルガー家がドレスを頼む機会が殆どなかったのよね。

でもヴォルフ様が私と婚約し、ドレスを贈ってくださるようになってから状況は変わったわ。アードラー夫人は他店にないドレスで新しい流行を作りたいと願い、他国のドレスを取り寄せる過程でヴォルフ様との伝手が出来たのだとか。そこに私が婚約者として現れたため、アードラー夫人は切望していた新しいドレスを作るようになって今に至る。そのドレスはゾルガー風と呼ばれ、我が国ではすでに定番になっているわ。

ドレスが置かれている部屋へロッテとティオと共に向かうと、部屋ではアードラー夫人がお針子たちと共に控えていた。

「お久しぶりね、アードラー夫人」

「侯爵夫人、ご無沙汰しております。王宮の舞踏会の衣装をお任せくださってありがとうございます」

トルソーに掛けられていたのはいつもの身体の線が出るものではなく、一般的なドレスだけどスカートの広がりがより抑えられたもの。上半身と袖は濃緑の絹に金銀の糸で繊細な刺繍が施され、袖は肩の辺りに膨らみを持たせてあり、その下はほっそりとしたラインで手首まで続く。スカートは濃緑の絹が程よく広がり、その上に繊細な金糸と銀糸で編まれたレースが重なって互いの色を引き立て合っているわ。我が家の色ね、レースを多用しているけれど色合いのせいか重厚感があって豪奢だわ。

「いつものドレスじゃないのね」

「はい、旦那様からそのようにと」

「ヴォルフ様が？」
どうして？　あのゾルガー風のドレスで広告塔になれと仰ったのはヴォルフ様なのに。
「何故……もしかして、太った？」
他の方々もあのドレスを着るようになって、私以上に上手く着こなしている方も増えたわ。もしかして、見劣りするようになった？
「まぁ、奥様、それはありませんわ。奥様の体形は変わっておりませんもの。旦那様はあのドレスは十分普及したからもういいと、そう仰いましたの」
「そ、そう……」
だったら大丈夫かしら？　確かにこのドレスを着る夫人は増えたから広告塔としては十分役目を果たせたってことね。よかったわ……
「こちらはルタ国で流行っているドレスですわ。彼の国はレースが秀逸で、ドレスもスカートの広がりを抑えたものが主流です。女王陛下がこのタイプをお好みだとか」
「まぁ、ルタ国の……」
我が国の北にある国で、女王陛下が治める国。女王陛下は確か陛下と同じ年代だったわよね。それくらいのお年なら広がりのあるドレスは好まないかもしれないわね。
「これだけのレースを作るのは骨が折れますが、高級感が出ますわ。ただ、その分重いのです。スカートが広がらないのはレースの重さのせいもありますわ」
なるほどね。レースで作ったドレスといった感じだものね。確かに重そうだけど……

「思ったほどじゃ、ないわね」
初めての形だからと試着を勧められて実際に着てみたけれど、少し重さを感じる程度で予想していたほどじゃなかったわ。暑い時期は辛いけれど、涼しい時期なら温かくていいかもしれない。それにしても細かい意匠ね。凄いわ、この技術……
「さすがは奥様、難なく着こなされてしまいますわね」
「そう？　そう言ってもらえると嬉しいわ」
それに、あのドレスよりこちらの方がいいわ。あれは身体の線が出るから慣れたとはいえ恥ずかしさがあるもの。体形を維持しなきゃいけないのも疲れるし。鍛錬をしていても維持するのは簡単じゃない。鍛えすぎてもよくないから。
「ふふ、舞踏会が楽しみね」
ヴォルフ様の衣装はどうなるのかしら？　ドレスと合わせているし濃緑の生地は同じになりそうね。いえ、これは光沢があるから男性の正装にすると軽く見えるかしら？　想像するだけでも楽しくなってきたわ。アードラー夫人のことだからまたアッと驚くような素敵なものになるのでしょうね。

舞踏会に向けての準備をしている間に季節は仲春を迎えた。庭には若葉が芽生え、春の花々が競うように咲く一年でもっとも美しい季節がやってきたわ。冬の間は離れていた人々がようやく戻ってきて、王都は再び賑わいを取り戻している。

そんな中、ミュンター家のエクトル様の処刑が行われ、家族がその後を追った。エクトル様が恨みを募らせた事情も気持ちもわからなくもない。本を正せば彼の祖父が行ったことに起因するし、彼自身に罪はなかった。でも法を破ったことに変わりはない。なんとも後味の悪い結末になったけれど、だからといって彼らの恨みを甘んじて受けるわけにはいかないわ。

春の気配が日に日に増して新年の舞踏会が近付く中、私宛に一通の書状が届いた。

「イルーゼ様、ご実家からお手紙が来ておりますが」

家政の仕事が一段落したところでロッテがトレイに手紙をのせてやってきた。

「お義姉様から？　どうされたのかしら？」

来週の舞踏会には出席されると聞いているけれど。事業の件かしら？　でもそれは今、フレディ様が窓口になっているわ。だったらエドゼルのこと？

封を切って流麗な文字を追った。読み進めていたら気分が悪くなってきたわ……

「イルーゼ様？　どうされました？」

ロッテも不審に思ったのか、遠慮がちに声をかけてきた。彼女になら話してもいいわね。

「お姉様のことよ」

「お姉様って……まさか……」

姉と呼ぶ人物は二人いる。けれど、向ける感情には大きな差があるわ。

「フィリーネお姉様の方よ。お母様から、社交界に戻れるよう口添えしてほしいですって」

どう受け止めていいのか迷ってしまう。実際は姉ではなく母方のいとこだった方。両親が離婚した際、母と共にガウス家を出て、今は母の実家が持つ別邸で祖父母と共に暮らしているとヴォルフ様からは聞いているけれど……

「はぁ？　口添え？　あれほどイルーゼ様を蔑ろにしておいて？　よくそんな図々しいことを口に出来ますね」

容赦の欠片もないわね。でも仕方ないわ、ロッテだってあの人には散々嫌な目に遭わされたから。

「それに奥様だって……実子のイルーゼ様よりフィリーネお嬢様を優先していたくせに。理解に苦しみますわ。頭沸いているんじゃありませんか？」

「ロッテ、ちょっと品がないわ」

ティオやザーラ辺りに聞かれたらお小言が飛んでくるわよ。

「今はイルーゼ様しかいないから大丈夫です」

そうかしら？　どこかで影が聞いていそうだけど……って、そんなこと、ロッテは知らない方がいいわね。

「それで、イルーゼ様、どうなさるのです？」

「どうもこうも話にならないわ。離婚した後、お母様には何度か手紙を送ったのよ。だけど一度も返事はなかった。自分たちの都合が悪くなったからといって頼られてもね」

せめて元気にしているかとか、相談なく離婚してすまなかったとか、そんな一言でもあったら考えたけれど、今までそういった言葉は一つもなかった。お義姉様からの手紙にも、私を気にかける

言葉はなく、ただ困っているから助けてほしい旨が切々と綴られていたとか。それで私が動くと思っているなんてね。何を言っても無駄だと諦めて言うことを聞いていたから、今度もそうなると思っているのかもしれないけれど……

「当たり前です。イルーゼ様の不幸の元だったフィリーネお姉様のことを頼もうなんて図々しいです」

ロッテの言う通りね。いつだって私よりも姉を優先して憚らなかった母。父を恨んでいたし、姉の実父は母と相思相愛だった方だからその忘れ形見の彼女を優先したかったのかもしれないけれど、そんなこと私には関係ない。自ら私の手を離しておいて、今になって頼られても、困るわ。

一晩考えたけれど結局考えは変わらなかったので、用事があるなら直接連絡するよう、お義姉様から母に伝えてほしいとお願いした。お義姉様を煩わせるなとの意も込めて。すでにガウス家とは無関係なのだし、あの兄からお義姉様を守らなかった母が頼みごとを出来る立場でもないもの。

母から連絡があるかと思っているうちに日は過ぎ、結局新年の舞踏会の日を迎えてもなんの連絡もなかった。薄情かもしれないけれど、母と姉に関してはヴォルフ様の心証が悪い。口添えを頼まれてもヴォルフ様が是と仰るかわからない。もし放っておけと仰ったらどうしようもないわ。ヴォルフ様のお気持ちを無視してまであの人たちを助けようとも思えなかった。

庭の草木に春の深まりを感じるようになった頃、王家主催の新年の舞踏会の当日を迎えた。昨年は陛下の在位十五年の慶事があったけれど、最近体調が優れないとの噂が流れている。そんな風に

囁かれ始めたのは陛下の王宮へのお戻りが予定よりも遅れたから。ヴォルフ様は大したことではないと仰っていたけれど、体調が優れないのは事実らしい。

ヴォルフ様の様子を窺っても、変わったところは見られなかった。実のお父様でもあるからどう思われているのかと気になるけれど、以前何も思うところはないと仰っただけに、それ以上お聞きすることも出来ないわ。ヴォルフ様からしたら捨てられたのだから、今更だとの思いがおありなのかもしれない。ご苦労をされた半生を思えば親だなんて感じられないのも仕方がないのだけど……難しいわね。

もっとも私だってお義姉様を家族とは思いたくない気持ちがある。蔑ろにされたあの痛みは簡単には忘れられないわ。これだけ満たされていても時折ふと嫌な感情が思い出されて胸が痛むけれど、いつまでも気に病んでも仕方がないわね。

まだ外が薄暗い時間帯、ロッテを始めとした侍女たちがやってきた。

「イルーゼ様、準備を始めますわよ」

舞踏会は午後からだけど、準備に時間をかけるのは貴族家の夫人には当然のこと。見た目で相手の経済状況などが知れるから準備に手を抜くなんてあり得ない。私の場合、ゾルガー侯爵夫人としての立場もあってロッテたち使用人の気合はこれ以上ないほどに入っていた。

「ふふっ、今回も完璧ですわ」

「さすがはアードラー夫人、今年の流行はこのドレスですわ」

「ええ、イルーゼ様も難なく着こなされて。今回も最も注目を集めるのは間違いありませんわ」

美容関係を担う侍女たちが満足げに頷き、ロッテたちもその後ろで頷いていた。昨秋のクラリッサ様の件や隠し子騒動もあって、未だにヴォルフ様を狙う女性は少なくない。あわよくば……と虎視眈々と狙われているのは変わらないわ。嫁いで一年以上経つのにまだ子が出来ないせいでもあるでしょうね。同じ年の令嬢たちの中には既に出産して二人目がお腹にいる方もいるとか。嫡子を産むことに女性は人生をかけている。子が出来なければ第二夫人を迎えることになり、そうなったら婚家では肩身の狭い思いをすることになる。

「奥様、準備はいかがでしょうか？　旦那様がお待ちです」

扉を叩く音の後、ティオの声が続いた。ヴォルフ様の準備は終わったのね。

「今参ります」

扉を開けるよう目配せするとティオを先頭にヴォルフ様とアベルが続いた。ヴォルフ様は……私のドレスよりも艶のない濃緑の正装だった。艶がない分しっとりとした落ち着きがあって、だけど金銀の糸の刺繍とこれでもかと付けられた階級章や勲章が彩りを添えて、これ以上ないほどに豪奢だわ。それに背もお高いから、余計に様になっている。ずっと見つめていたいほどに素敵……嫌だわ、こんなヴォルフ様を他の女性に見せなきゃいけないなんて……

目の前まで来たヴォルフ様にじっと見下ろされた。無表情どころか怒っているようにも見えるお顔に、最初は何かご不興を買ったかと気を揉んで神経をすり減らしたけれど、今は滅多に怒る方ではないと知っている。

「いかがでしょう？　似合っています？」

「ああ」

そっけない返しも、もう怖くないわ。

「ふふ、素敵なドレスをありがとうございます」

「気に入ったのならいい」

「もちろんですわ。前のドレスもよかったですけれど、これもとっても素敵です」

ヴォルフ様はどうかしら？　気に入ってくださった？　何も仰らないのならそうなのよね。だってこのドレスを選んでくれたのはヴォルフ様だもの。

「ありがとう、アードラー夫人。今回もいい仕事をしてくれたわ」

「お褒めいただき光栄にございます」

最後まで細部の手直しをしてくれたアードラー夫人にお礼を言って、ヴォルフ様の手を取った。

「いってらっしゃいませ、イルーゼ様。これで女狐どもを蹴散らしてきてください」

背中にロッテの励ましを貰ったわ。ティオの片眉が上がったものの何も言わなかった。きっと彼も同じ気持ちだったからだと思いたいわ。後でお説教が待っていなければいいけれど……歩くたびにスカートが揺れる。足の線が見えないのが嬉しいわ。あれはあれで恥ずかしかったから。

「叔父上、イルーゼ嬢も」

玄関ホールに降りるとフレディ様が待っていた。

「フレディ様、お待たせしました」

「いや、待っていないよ。それよりも、今日はまた珍しい形のドレスだね」

意外にもフレディ様がドレスに言及したわ。男性はドレスなどどれも同じだと言う人もいるけれど、彼はそっち側の人ではないようね。

「ふふ、似合っています？」

「ああ。君は背が高いから叔父上とのバランスもいいよ」

「フレディ様、背のことは言わないでください。これでも気にしているのですから……」

女性は低い方がいいというのがまだまだ世間の声。ヴォルフ様が高いから気にならないけれど、ハリマン様の時は低い靴を履いて髪を高く結わないように気を付けていたのよ。

「あ、ああ。すまない……だけど、背の高い女性も、素敵だと思うけど」

意外だわ、彼がそんなことを言うなんて。アイシャ様は小さかったから彼の好みはそちらだと思っていたのに。

「行くぞ」

ヴォルフ様に促されて馬車に向かった。今日は天気もいいし風も弱くていい日和だわ。新しいドレスとヴォルフ様の正装姿に心が弾み、車窓の景色も特別に見えた。もっとも、浮かれてばかりもいられないのだけど……

「何か、懸念はございまして？」

いくつか気になる点はあるけれど、事前にわかっていたら対処も出来るわ。

「ミュンターの処刑があったばかりで動揺している者もいるだろう。何かするとは思わんが、恨みを抱いて仕掛けてくる輩がいるやもしれん」

「ミュンターの……」

フレディ様の声が沈んでいるのはアルビーナ様を思ってかしら？　同い年だったし彼女も一時は婚約者候補になっていた。お優しい彼だから苦手だった相手でも心は痛むかもしれない。

ゾルガー侯爵夫人として新年の舞踏会に参加するのは二度目だから、怖気づくことはなくなったわ。それでも入場する際は少し緊張するわね。今度のドレスはどう見られるかしら？　新しい流行に繋がるといいのだけど。侍従が呼びに来たので会場へ向かった。前方には五侯爵家の姿が見えたのだけど……あら、エルマ様の姿がないわ……どうなさったの？

「ご機嫌よう、ゾルガー侯爵、夫人も相変わらずお美しい」

ベルトラム侯爵が声をかけてきて、その横でバルドリック様が頭を下げた。ヴォルフ様はいつも通り頷くだけ。

「侯爵様、エルマ様は……」

「ああ、ちょっと調子を崩してね」

「まぁ、大丈夫なのですか？」

「ああ。何日か大人しくしていればよくなるだろう」

風邪かしら？　まだこの時期は急に冷え込んだり肌寒かったりする日があるから。いえ、もしかして、お子が？　バルドリック様を見ると困ったような笑みを浮かべた。それって……なんとも言いようのない感情が胸を覆う。嫌だわ、感傷的になっている。月のものが始まった時の痛みがまた

襲ってきた。
「ゾルガー侯爵ご夫妻、およびご令息ご入場です！」
感傷に関係なく王宮騎士に呼ばれた。その声を合図に会場に一歩踏み出すと、煌めくシャンデリアの灯りと人の熱気が一気に押し寄せてきた。数多の目が集まるのを感じるわ。しっかりしなきゃ、私はゾルガー侯爵夫人なのよ、どんな思惑があっても負けないわ。
いつも通り王族のダンスが始まり、国王ご夫妻と王太子ご夫妻が優雅に舞い踊る。昨年は在位十五年を迎え、我が国に憂いはないわ。王家のダンスが終わったら次は私たち五侯爵家の番。ヴォルフ様と共にダンスの輪に加わったけれど、今日はエルマ様がいらっしゃらないから四家だけね。明日にでもエルマ様にお見舞いの手紙を出さなきゃ。
「どうした？」
「……え？」
ターンをした後に身体が近付いた時、ヴォルフ様が尋ねてきた。どうしたって、何が？
「表情が固い」
心臓が跳ねそうになった。よく見ていらっしゃるのね。いえ、ヴォルフ様はいつもそうだったわ。
「なんでもありませんわ」
「気になることがあるなら言え。俺は察しがよくないからな」
お優しいのね。こんな風に気にかけていただいて、私は幸せ者だわ。ちょっと気にしすぎたわね。まだ一年だもの、これからよね。

「ふふ、本当に大丈夫です」
「そうなのか？」
「ヴォルフ様が気にかけてくださるだけで心の奥が温かくなりましたわ」
笑みが浮かんできて愛おしさが募る。幸せだわ、ヴォルフ様にこんなにも気にかけてもらえるのだから。背中に羽が生えた気分だわ。
ダンスが終わるとあっという間にたくさんの人に囲まれた。我が家との繋がりを求める方が集まってくるのはいつものことだけど、最近は令嬢を連れてくる人が増えている気がする。いえ、考え過ぎかしら……
「イルーゼ様、素敵ですわね、そのドレス」
ヴォルフ様がアルトナー侯爵に呼ばれて行ってしまった。一人になって沈んだ心を引き上げてくれたのは親友の弾んだ声だった。
「リーゼ様、お久しぶりですわ。お腹、目立ってきましたわね」
ふんわりした印象のリーゼ様。頬も以前よりもふっくらとしてきたし、小柄なせいかお腹が目立つわね。最近落ち着いてきたものの悪阻が大変だったと聞いていたから、今日は欠席かと思っていたわ。思いがけずお会い出来て心の靄が晴れていくよう。
「素敵なレースですわね。この意匠、なんて細かいの。凄く時間がかかったでしょうね」
「さすがですわ、リーゼ様。三月かかったそうです」
このドレス、昨秋から準備していたのよね。レースも。初めて我が国でお披露目するからと力を

入れていたわ。新しい流行を作るためには周到な準備が必要だと教えてくれたのはリーゼ様だったわね。

「これは真似するのも簡単ではありませんわね」

「あら、アウラー商会は素晴らしい職人をたくさんお持ちではありませんか。次の卒業の夜会が楽しみですわ」

「ええ、帰ったら早速手配しますわ。ああでも、出産はその頃だから間に合うかしら？」

心配するのはドレスのことなのかお子のことなのか。リーゼ様って商売のことになると人が変わるから怖いのよね。

「リーゼ様ったら、無理はなさらないでくださいませ。リーゼ様とお子が最優先ですわよ」

「ふふ、わかっていますわ」

大丈夫よね？　そうであってほしいわ。ローレンツ様がしっかり見ていらっしゃるから大丈夫だとは思うけれど。

「そういえば、エルマ様は欠席なのですね」

「ええ、風邪のようです。大したことはないが念のためだと、侯爵様が仰っていましたわ」

もしかしたらお子が出来たのかと思ったけれど、違ったのかしら？　まだわからないのかもしれないけれど。

「まぁ。最近ちょっと寒かったですものね」

「ええ、リーゼ様こそお気をつけてくださいね。お子のためにも」

妊娠中の病気はお子に影響が出る場合もあると聞くわ。時には流産や死産にも繋がるというし、だったら母親だって無関係ではいられないわ。

「そこは大丈夫ですわ。ローレンツがうるさいですもの」

ローレンツ様はリーゼ様がお好きですものね。バルドリック様とはまた違った意味で過保護だし。そんなことを思っていたらご当人がやってきた。

「ゾルガー侯爵夫人、ご無沙汰しております」

「お久しぶりですわね、ローレンツ様」

美男子ではないけれど、穏やかな雰囲気と人懐っこい笑顔で人に警戒心を抱かせない方。優しそうに見えるけれど商人としては厳しい目を持っていて、侮(あなど)って痛い目に遭った人は少なくないのよね。

そんな彼に新しい特産品を作り出そうと悩んでいたフレディ様を紹介して、それからは商売のことで助言をいただくようになった。年も近いからフレディ様も話しやすいようで、相談に乗ってくださる貴重な存在になりつつあるとか。

「いつもフレディ様がお世話になっておりますわ」

「いえいえ、私の方こそいろんな伝手を紹介していただいて助かっております」

一方的に頼るだけの関係ではないのね。自信がなさそうなことを言っていたけれど上手くやっているじゃない。

「ふふ、最近は次期当主の若い令息たちが集まる倶楽部(クラブ)に誘っていただいているとか。彼も喜んで

いましたわ」

フレディ様は警戒心が強くてエーリック様以外に親しくしている方がいないのが心配だったけど、後継候補を下りてから少しずつ変わってきている。領地経営でそれなりに成果を上げて自信が付いたのもあるかもしれないけれど、いい傾向だわ。

「そう言っていただけるとお誘いした甲斐もあります。フレディ様は博識で考えも柔軟でいらっしゃいますから商人に向いていると思いますよ」

「まぁ、それはぜひ本人にお願いしますわ。私が言うよりもきっと喜びますから」

商会を取り仕切り始めているローレンツ様に言われた方が自信も付くわ。知識は十分にあるし彼を支える者たちもたくさんいる。フレディ様に足りないのは経験と自信だもの。

「ふふっ、イルーゼ様、近々お伺いしてもよろしいかしら？」

「まぁ、私は大歓迎ですけれど……お腹は大丈夫ですの？」

「大丈夫ですわ。出産には体力がいると言われたから、最近は出来るだけ外出しているのです」

「リーゼ、外に出るのは避けてほしいって言っているだろう」

すかさずローレンツ様が止めに入ったわ。やっぱりリーゼ様、じっとしていないのね。悪阻でしばらく動けなかった分を取り戻そうとしているようにも見える。

「だったら、私が伺いますわ」

「まぁ、でもそれは危険ではありませんの？　侯爵様がお許しになりませんでしょう？」

そう言われてしまうと何も言い返せないわね。ヴォルフ様はなんて仰るかしら？　妊婦のリーゼ

様に無理はさせたくないからお願いしてみるわ。

リーゼ様たちとは義父であるアウラー伯爵が呼んでいると言うのでそこで別れた。ヴォルフ様は……なかなか戻ってこられないわね。まだアルトナー侯爵とお話し中なのかしら？　探しに行こうかと歩き始めたところで見知った顔を見つけた。

「シリングス公爵夫人」

壁の近くで佇む夫人に声をかけた。元婚約者だったハリマン様のお母様で、いずれ義母になるはずだった方。久しくお会いしていなかったけれど、少しお痩せになったように見えるわ。ハリマン様のことで気苦労が絶えないのでしょうね。

「まぁ、イルーゼ様、いえ、ゾルガー侯爵夫人、ご無沙汰しております」

深く頭を下げる姿にあったはずの未来と今の差を感じる。この方だけは私の味方になってくださっていた。ハリマン様があなっても嫌いになんかなれないわ。

「お久しぶりです。少しお痩せになったのではありませんか？」

「まぁ、気にかけてくださってありがとうございます。でも、大丈夫ですわ」

儚げな笑みに苦労を感じる。ハリマン様がもう少し慎重に行動されていたら夫人にこんな苦労をかけずに済んだのに……

「ハリマン様のご婚約、おめでとうございます」

先日、クラリッサ様との婚約が正式に公表されたわ。今日も二人で参加していたからどこかにいるのでしょうね。

「ありがとうございます。これで……あの子も次期当主としての自覚と責任感を持ってくれればいいのですけれど……」

「きっと大丈夫ですわ。婚約者のクラリッサ様は可憐な方だと伺っています。きっと仲睦まじい夫婦におなりになりますわ」

ただ、夫人のご苦労が減ることはないかもしれない。そこはあの二人次第よね。いつまでも親に頼り切っていないで大人になった自覚を持ってほしいわ。それから夫人と他愛もない話をしていたけれど、周囲は興味津々にこちらを見ていた。ハリマン様と姉の不貞行為は世間に知られているから、その母親である夫人と私が親しくしているのが意外なのでしょうね。だけど、夫人に思うところはないわ。あの時だって私の側に立って怒ってくださったのは夫人だけだったのだから。

「ヴォルフ様、私と踊ってくださいませ」

夫人と談笑していたところで夫の名が聞こえて思わず振り向いてしまった。その先にいたのは……アルトナー侯爵とランベルツ侯爵と話をしていたらしい夫と、ヘルガ嬢だった。濃緑の胸元の開いたゾルガー風ドレスを纏った彼女は年下とは思えないほど妖艶に見えたけれど……未婚の令嬢なのにちょっと品がなさすぎないかしら？　それにヴォルフ様の名を呼ぶなんて……以前同じことをして窘められた夫人がいたと知らないのかしら？

「イルーゼ様、あの方は……」

「分家のご令嬢ですわ。私が嫁がなければ夫の第二夫人になる予定だった方です」

それだけで夫人はおおよその事情を察してくださった。まぁ、貴族家ではよくある話だものね。

家同士の利益が絡めば当人や周りの思惑など関係なく婚姻が結ばれることは珍しくない。もっとも私と婚姻してもヴォルフ様にはほとんど利がなかったのだけど。

「分家の……歴史の長い家は大変ですわね」

心配してくださった夫人の言葉が胸にずしりと残る。その点シリングス公爵家が羨ましいわね。夫人はお優しいし、うるさい分家もいないから。もっとも、別の苦労も多いのだけど。

会話は聞こえないけれど、ヘルガ嬢はヴォルフ様の腕に絡みついて話しかけていた。その距離のなさに扇を持つ手に力が籠もる。ヴォルフ様は私以外に名呼びを許さないと仰っていたからそこは心配していないけれど……案の定、ヴォルフ様は彼女の手をさらりと振りほどき、何か言葉を返していた。なんて仰ったのかしら？　シリングス公爵夫人も気遣わしげにその様子を見ている。

ほどなくしてヘルガ嬢がヴォルフ様から離れた。よかったわ、ダンスは断ってくださったのよね。安堵しているのも束の間、彼女がこちらに向かってきている……わけじゃなさそうね。仲のいい令嬢と何かを話しているけれど、あれは男爵家の令嬢でいつも一緒にいる方ね。絡まれるのも面倒で夫人に声をかけた。夫人も察してくださったようでにこやかに言葉を返してくださる。その点の機微はさすがだわ。だけど……

「あら、石女の奥様ではありませんか」

さっさとどこかへ行ってほしい相手ほど絡んでくるものらしい。しかも今は公爵夫人と会話中なのに。心の中でため息をついていると夫人の片方の眉が上がったわ。かなりご不快に思われたようね。困った方ね、こんな公の場でマナー違反を平然と犯すなんて。聞かなかったことにしてあげ

立ち読みサンプルはここまで